

## 研 究

医療場面において幼児に関わる看護師が用いる  
オノマトペの検討石館美弥子<sup>1)</sup>, 谷田部かなか<sup>2)</sup>, 山下 麻実<sup>1)</sup>  
宍戸 路佳<sup>3)</sup>, 久保 恭子<sup>1)</sup>, 鈴木久美子<sup>4)</sup>

## 〔論文要旨〕

オノマトペとは、擬音語・擬態語の総称である。本研究は子どもに関わる看護師のオノマトペの表出状況を把握し、医療場面における子どもへ説明の利用可能性について検討した。看護師10名を対象にインタビュー調査を行い、面接内容を録音し分析した。得られた発話からオノマトペを抽出し、感覚的様相に関する分類を行った。その結果、看護師は幼児に対して動作に関するオノマトペを最も多く使用する傾向にあることが明らかとなった。オノマトペは、状況喚起力、身体性、心情融和性を持つ、有用なことばであり、今後、医療場面での幼児への説明に活用できる可能性が示唆された。

Key words : オノマトペ, 看護師, 幼児, 医療場面

## I. 緒 言

子どもに関わる看護師のことばには、成人を対象とする会話にはあまりみられない独特の言語的対応がある。血圧測定は‘シュポシュポ’、注射は‘チックン’、吸入療法は‘モクモク’などがその例である。ここでは、難解な医療用語をわかりやすいことばに変換させたオノマトペが用いられている<sup>1,2)</sup>。

日本語では、表現しにくい音、動作の様態、物事の状態などの微妙なニュアンスも、オノマトペを用いることによって鮮明かつ簡潔に表現することができる。オノマトペとは、日本語の中にある、ゴーン（鐘）、キーン（飛行機）のような音韻を基礎とする擬音語と、クルクル（回転）、ピカピカ（輝き）のような現象・事象の様態や、音韻が伴わないそれらを比喩的に表現した擬態語を一括して言うものである<sup>3)</sup>。

一般に、大人が幼児に向けて話すことばは、成人に向けて話すことばとその特徴が異なることが知られている。その特徴として、抑揚を大きくとる韻律的側面、関係節の利用を避けるなど統語的に単純な発話を行う統語的側面、繰り返し冗長な発話を行う語用論的側面などが挙げられる<sup>4,5)</sup>。日本語を母語とする養育者は、子どもに話しかける際にオノマトペを多用すると言われている<sup>6,7)</sup>。オノマトペを多用するのは、オノマトペの持つ類像性の高さが子どもの言語取得の助けとなることを直感的に知っているためと指摘されている<sup>8)</sup>。

これまで、障害児教育<sup>9)</sup>、スポーツ教育<sup>10)</sup>において、幼児に対して動作を行う際の声かけにオノマトペを使用することで、適切な動作が可能となることが示されている。また、子ども教育の現場では、保育者が動作と共にオノマトペを使用することによって、幼児がより臨場感を持って保育者の説明を理解する様子が確認

Onomatopoeias Used in Nursing Care for Preschoolers in Pediatric Medical Procedure [2578]

Miyako ISHIDATE, Kanaka YATABE, Asami YAMASHITA, Mika SHISHIDO, Kyoko KUBO, Kumiko SUZUKI

受付 13.12. 2

採用 14. 2.23

1) 横浜創英大学看護学部看護学科（看護師）

2) 聖マリアンナ医科大学医学部スポーツ医学（研究職）

3) 横浜創英大学看護学部看護学科（助産師）

4) 元山梨大学医学部附属病院看護部（助産師）

別刷請求先：石館美弥子 横浜創英大学看護学部看護学科 〒226-0015 神奈川県横浜市緑区三保町1番地

Tel : 045-922-6289 Fax : 045-922-5642

されたという報告<sup>11)</sup>もある。

このように、国内外におけるオノマトペの研究は、いくつか報告されているが、子どもに関わる看護師が使用しているオノマトペの調査は過去に見当たらない。小児保健医療においてオノマトペに注目したことばの研究は新しい着想である。オノマトペが子どもにとって有効なことばであれば、小児保健医療全般に応用可能なコミュニケーション・ツールとしての貢献度は高い。今後、オノマトペの使用が子どもの理解に有効的に働くのかを実証的に検討することで、その利用価値を確認することができよう。そこで今回はその前段として、小児医療現場でのオノマトペの表出状況を抽出し分析することとした。これによって、医療場面における子どもへの望ましい言語的対応の一端としての、オノマトペの利用可能性を明らかにしたいと考える。

## II. 用語の定義

小児医療オノマトペ：オノマトペとは、擬音語・擬声語・擬態語の総称であり、フランス語に語源を持つ<sup>12)</sup>。擬音語や擬声語は、「ザーザー」、「ニャーニャー」などのように実際の音や声を言語描写したものを指す。これに対して擬態語は、「ヌルヌル」、「ドキドキ」などといった音を発しない生物や事物の動き・変化の状態・様子などを言語描写したものである。本研究では、小児医療現場において、対幼児に使用していることばであり、擬音語・擬態語に加え、擬音語・擬態語に類似した形を持つ表現である「痛い」、「大事」を反復形に整えた「イタイイタイ」、「ダイジダイジ」などの一般語彙のオノマトペ化も含むことばを小児医療オノマトペとした。

類像性：類像性とは、言語音と参照対象が類似的・非偶然的関係を持つ性質を指す<sup>13)</sup>。すなわち、意味と形が密接に結びついていることを定式化したものである。例えば、ネコの鳴き声を日本語話者は典型的に「ニャー」、英語話者は“mew”と呼ぶが、これらは実際のネコの鳴き声を各言語の音韻体系下で模倣したものと考えられ、言語音と参照対象はこのように密接に結びついている。

## III. 方法

### 1. データ収集期間

2012年8月。

### 2. 研究対象者

A県の大学病院1施設の小児病棟に勤務する、5年以上の臨床経験を持つ看護師10名。総合病院看護部の協力を得て、研究参加を募り、研究と趣旨について一斉に書面と口頭で説明・協力を依頼した。説明は研究者2名が実施し、申し出のあった看護師を対象とした。

### 3. 調査方法

半構成的面接法を実施した。プライバシーが保たれている個室で一人1回、20~37分の面接を行い対象者の説明的発話を収集した。図1のように、医療場面における幼児のイラストをタブレット端末に設定し視覚刺激とした。具体的には、バイタルサイン測定、採血、点滴、吸入療法、口鼻腔吸引、腰椎穿刺、骨髄穿刺を受ける幼児を描いた、7種類のイラストである。対象者には、タブレット端末に映し出されたイラストの幼児に対して、各々の医療処置を説明するよう教示した。面接の最後に、イラストに描かれた医療処置場面以外で、幼児に説明していることばについて、追加で自由に発言してもらった。面接では、幼児に対する、より自然な説明的発話を導き出すために、説明時間の制限は設けず、対象者のペースで進められるよう配慮した。面接はすべて著者が行い、面接内容は許可を得てICレコーダーに録音した。

### 4. 分析方法

面接で得られたデータを逐語録に起こし、対象者の説明的発話データを抽出した。データはCSV形式によるファイルとして整え、Text Mining Studio Ver4.2 (数理システム)により読み込んだ。分析を開始する前に、テキストデータの分かち書き (形態素解析) を



図1 タブレット端末に設定した視覚刺激例 (バイタルサイン測定)

行い、基本情報を把握した。小児科オノマトペの抽出は、日本語オノマトペ辞典<sup>14)</sup>を参考にグルーピングした。抽出されたオノマトペは、福田ら<sup>15)</sup>を参考とした、近藤ら<sup>16)</sup>による5項目、①視覚(「ピカッ」と光る)、②聴覚(「カァカァ」鳴く)、③触覚(「ベタベタ」する)、④動作(「グルグル」回る)、⑤気分・心情(「ドキドキ」する)を採用し分類し、オノマトペの傾向を検討した。なお、1つの語で異なる感覚刺激、あるいはそれらの融合したものを表現していると思われる場合、それらの内の主たる感覚に分類した。分類にあたり、小児看護学、心理学研究の専門家と協議し、信頼性、妥当性の確保に努めた。

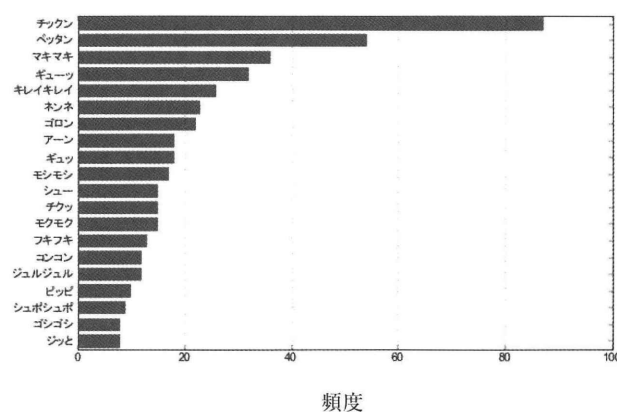


図2 看護師の発話から抽出されたオノマトペの単語頻度(総数)上位20件

## 5. 倫理的配慮

データ収集に先立ち、対象看護師の所属する病院の責任者である副院長兼看護部長に文書と口頭で趣旨を説明し、了解を得た。研究参加者へは、研究の意義・目的および方法、匿名性の確保、参加の自由と中断の保証、研究成果の公表可能性などについて口頭と文書で説明した。なお、本研究は横浜創英大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号 第001号)を得て行った。

## IV. 結果

### 1. 研究対象者の概要

研究対象者10名(A~J)はいずれも大学病院に勤める看護師であり、小児科看護師経験年数は5~18年であった。

### 2. オノマトペの傾向

#### 1) オノマトペの出現頻度

看護師10名の発話にみられた、延べオノマトペ数は503単語、オノマトペ種別数は152単語であった。図2は、出現回数の多かったオノマトペの上位20件を示したものである。最も頻度が高かったのは「チクン」であり、87回であった。これは、採血、点滴、腰椎穿刺、骨髄穿刺のいずれの処置・検査における針の刺入の説明に使用された表現であった。原文一覧を見ると(表1)、採血では、「おてて出して、チクンするよー」、点滴では、「チクン、ズッと入れとくよー」、腰椎穿刺では、「背中チクンだよ」、骨髄穿刺では、「腰チクンがあるから、ベッドにゴロンしようね」など、表現されている。

出現頻度2位の「ベッタン」は「チクン」と共起

して出現することが多く、54回みられた。これは、絆創膏を貼るときの表現であり、「ベッタン、ベッタンしようねー」などがその例である。続いて、「マキマキ」が36回みられた。これは出現頻度18位の「シュボシュボ」と併せて、血圧測定の説明時に用いられる表現であり、マンシュートを巻き、送気球を用いて空気を入れる動作を説明するときに用いられている。心拍、心音、呼吸音測定は「モシモシ」であり、17回みられた。胸部聴診の説明で多く表現されていた。「ピッピ」の10回は体温測定を表現している。続く「キューツ」とともに表現することが多かった。4番目の「キューツ」は32回みられ、多義性のある語であった。脇の下に体温計を挟むとき、血圧測定の際、腕をマンシュートで締めるとき、採血時に手を握ってもらうとき、駆血帯で手を締めるとき、止血で押さえるとき、腰椎穿刺の体位をとるとき、といった、あらゆる場面で表現されていた。5番目が「キレイキレイ」の26回であり、14番目の「フキフキ」とともに、針刺入時の消毒のときに多く表現されていた。

「モクモク」、「シュー」は15回で、吸入液が噴霧される様態を表現しており、吸入療法時に特徴的にみられた。口鼻腔吸引の際の説明は「ジュルジュル」が12回みられた。同数の12回出現していた「コンコン」は、吸入療法や口鼻腔吸引、呼吸音聴取の際に咳嗽を誘発する誘導として表現されていた。19番目の「ゴシゴシ」は清潔ケアで入浴や清拭の際に表現され、8回出現していた。

#### 2) オノマトペの傾向

研究対象者それぞれの分類結果を図3に示す。また、表2は、各分類項目で確認されたオノマトペ種別を示

表1 看護師の発話から抽出された医療場面別オノマトペと原文例

医療場面	オノマトペ	原文の例 (補足説明)
バイタルサイン測定	ギユッ	体温計はさむね, <u>ギユッ</u> てしててね
	ピッピ	お熱はかるねー, <u>ピッピ</u> するねー
	モシモシ	(心音測定で) <u>モシモシ</u> するねー(聴診器を当てる)
	ドキドキ	<u>ドキドキ</u> してるんだよー
	マキマキ	(血圧測定で) <u>マキマキ</u> するねー(マンシエットを巻く)
	シュボシュボ	<u>シュボシュボ</u> するよー(空気を入れる)
	シュッシュ	<u>シュッシュ</u> ってなって(空気を入れる)痛くないからねー
	ゴロゴロ	(腸音聴取で) お腹, <u>ゴロゴロ</u> いってるかなー
採血	チクン	(採血で) おてて出して, <u>チクン</u> するよー
	キレイキレイ	ここ, <u>キレイキレイ</u> するねー(消毒する)
	ギューッ	(駆血帯で縛るとき) ちょっと, <u>ギューッ</u> てするけど…
	ベッタン	<u>ベッタン</u> , <u>カット判ベッタン</u> しようねー(絆創膏を貼る)
	ネンネ	<u>ネンネ</u> する(横臥する)か,
	シャンコ	<u>シャンコ</u> する(座る)か, <u>どっち</u> にしようか?
点滴	チクン	<u>チクン</u> のあとに, お薬行くねー
吸入療法	モクモク	<u>モクモク</u> さんしようねー(噴霧)
	シュー	<u>シュー</u> って(噴霧), 出てくるから, それ吸っててね
口鼻腔吸引	ジューッ	<u>ジューッ</u> て吸うよ
	ジュルジュル	<u>ジュルジュル</u> ねー
腰椎穿刺	チクン	背中 <u>のチクン</u> だよ
	チクン	腰 <u>のチクン</u> があるから
骨髄穿刺	ゴロン	ベッドに <u>ゴロン</u> しようね(横臥する)
	チョンチョン	消毒, <u>チョンチョン</u> ってするよ, 冷たいよー
	ポンポン	(消毒を) <u>ポンポン</u> ってするよー
	バッテンコ	(テープを貼るとき) <u>バッテンコ</u> に貼るよ
	ゴシゴシ	(清拭で) からだ, <u>ゴシゴシ</u> するよー
清潔ケア	アワアワ	(入浴で) <u>アワアワ</u> で, 遊ぼうか?
	ゴロゴロベッ	(歯磨き後の含嗽で) <u>ゴロゴロベッ</u> だよー
	クルクル	(超音波検査で) <u>クルクル</u> する検査だよー
検査全般	カッシャン	(X線検査で) お写真, 撮りに行くからね, <u>カッシャン</u> だよー
	カンカン	(MRI検査で) <u>カンカン</u> の部屋に行くよー
	ガーガー	(CT検査で) 穴の中に入ってね, <u>ガーガー</u> いうけどね

したものである。

看護師10名の結果は、述べ語数および異なり語数ともに、いずれも〔動作〕に関するオノマトペが最も多く、〔聴覚〕、〔触覚〕が続いた。〔気分・心情〕と〔視覚〕に関するオノマトペは少なかった。このうち最多と次多となる〔動作〕と〔聴覚〕について $\chi^2$ 検定を行ったところ、述べ語数 ( $\chi^2(1, N=1,602) = 259.778, p < 0.001$ )、異なり語数 ( $\chi^2(1, N=304) = 4.338, p < 0.05$ ) とともに有意差が認められた。

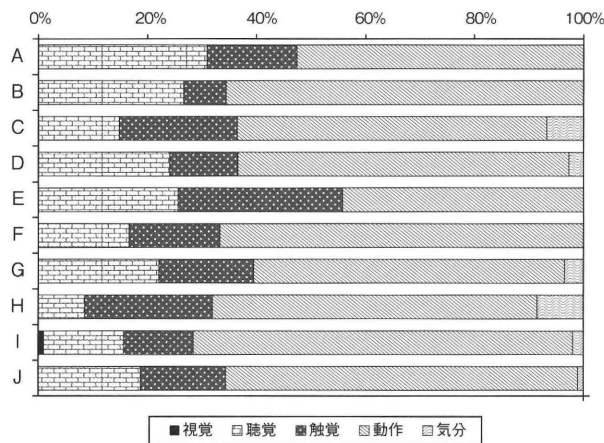
## V. 考 察

小児病棟の看護師は、医療場面における幼児への説明でオノマトペを多用していることがわかった。分類

では、〔動作〕に関するオノマトペが最も多く、続いて〔聴覚〕に関する語が出現していた一方、〔気分・心情〕、〔視覚〕に関する語は少なかった。対象となった10名の看護師全員が同じ傾向を示しており、これは、保育者を対象とした、先行研究<sup>11,16)</sup>の調査結果と一致する。そこで以下に、これらの分類に基づき、看護師の発話にみられたオノマトペの傾向とその背景を考察する。

### 1. オノマトペの状況喚起力

出現頻度の高い〔動作〕、〔聴覚〕に関するオノマトペを見てみると、簡潔に情景を表現している言語表現であり、イメージとの結びつきが強いことがわかる。



対象者	視覚	聴覚	触覚	動作	気分・心情	総数
A	0 (0.0)	30 (30.9)	16 (16.5)	51 (52.6)	0 (0.0)	97 (100.0)
B	0 (0.0)	24 (26.7)	7 (7.7)	59 (65.6)	0 (0.0)	90 (100.0)
C	0 (0.0)	11 (14.9)	16 (21.6)	42 (56.8)	5 (6.7)	74 (100.0)
D	0 (0.0)	27 (24.1)	14 (12.5)	68 (60.7)	3 (2.7)	112 (100.0)
E	0 (0.0)	11 (25.6)	13 (30.2)	19 (44.2)	0 (0.0)	43 (100.0)
F	0 (0.0)	9 (16.7)	9 (16.7)	36 (66.6)	0 (0.0)	54 (100.0)
G	0 (0.0)	19 (22.1)	15 (17.4)	49 (57.0)	3 (3.5)	86 (100.0)
H	0 (0.0)	4 (8.5)	11 (23.4)	28 (59.6)	4 (8.5)	47 (100.0)
I	1 (1.0)	15 (14.7)	13 (12.7)	71 (69.6)	2 (2.0)	102 (100.0)
J	0 (0.0)	18 (18.8)	15 (15.6)	62 (64.6)	1 (1.0)	96 (100.0)

図3 5項目の感覚様相に分類された看護師別オノマトペの総数と割合(%)

例えば、体温計を持ちながら‘ピッピ’というオノマトペを聞くと、大抵の幼児は体温測定をすることを即座に理解できる。‘ピッピ’という音は、電子体温計の発信音を意味するが、つまり、この一語だけで体温測定をする行為の具体的な描写力を持つことになる。血圧測定の例では、‘マキマキ’、‘シュポシュポ’と表現され、腕に巻いたマンシュートの緩やかに膨らむ音とその情景を思い浮かべることができる。吸入療法の例では、‘モクモク’と吸入器から噴霧される煙が出てくる様態を、骨髄穿刺の例では、‘チョンチョン’、‘ボンボン’など、消毒液をつけた綿球を用いて皮膚面を軽く消毒する様子が表わされており、実施さ

れる医療処置を端的に描写している。また、X線検査を‘カッシャン’、MRI検査を‘カンカン’、CT検査を‘ガーガー’という耳障りな機械音を用いることで、音の大きい検査の特徴を強調して示している、などが挙げられる。

一般に、わが国は欧米諸国と比較してオノマトベ表現が多いことが知られている。幼いころから、感性的ないし身体的な経験との共起関係の中でオノマトペが用いられてきている。臨場感のある描写力を持つオノマトペは、それ自体で出来事全体を表すことができることから、主観的でありながら、強く感覚イメージを喚起する表現と言える。日本語母語話者であれば、たとえ幼い聞き手であってもオノマトペを介してある特定の場面や状況、出来事を喚起できる<sup>17)</sup>ことから、看護師の説明においてオノマトペをいかに効果的に使っていくかは幼児にわかりやすく伝えるための重要な要素であることに間違いはない。

## 2. オノマトペの身体性

幼児の協力を得るためには、個々の医療処置場面で、幼児自身がどのように行動しなければならないのか、理解してもらう必要がある。保育者が幼児の動きを誘発する際に〔動作〕を描写するオノマトペを使用しているように、看護師もまた、意図する動作を幼児に遂行してもらうために、〔動作〕のオノマトペを使用していることが考えられる。

多様な用途で使用された、‘ギューッ’という表現は、運動障害児へ課題動作を指示するときに多く使用されていることが示されており<sup>9)</sup>、本研究においても動作を指示する際に多用されていることがわかった。‘ギューッ’という表現からは少し押さえる程度という、微妙な重量感を持つ行為が端的に描写され、直感的、身体的な理解を可能にしている。

オノマトペは複数の意味を持つ多義語である。例えば、〔動作〕に分類された‘ブクブク’は〔聴覚〕、〔動作〕において複数の意味を持つ語である。〔聴覚〕では、連続して泡立つ音を、〔動作〕では、口中に液体を含み、頬を膨らませながらすすぐ動きを意味している。本研究では、このうち、優位な項目である、歯磨き後の含嗽である〔動作〕に分類された。

川口<sup>18)</sup>が指摘しているように、オノマトペは同一語でも2つ以上の意味分類に当てはまる用法を持つことから、文脈において真の意味を判断することになる。

表2 看護師の発話から抽出されたオノマトペの分類

分類	視覚	聴覚	触覚	動作	気分・心情	総数
延べ語数 (割合)	1 (0.1)	168 (21.0)	129 (16.1)	485 (60.5)	18 (2.2)	801 (100.0)
異なり語数 (割合)	1 (0.7)	57 (37.5)	13 (8.6)	75 (49.3)	6 (3.9)	152 (100.0)
オノマトペ種別 [頻度]	ピカピカ [1]	コンコン [15] シュー [13] ビッピ [12] シュボシュボ [12] ゴロゴロ [8] ジャブジャブ [7] ジュルジュル [7] ビビッ [6] シュッシュ [6] シューッ [5] ゼーゼー [5] シャカシャカ [5] チャブチャブ [5] ゴホン [3] シューシュ [3] シュッシュ [3] ゴホゴホ [3] ズルズル [3] ポタポタ [2] ガーガー [2] ガーンガーン [2] カッキャン [2] カンカン [2] ガンガン [2] カンカンカン [2] ゲホゲホ [2] ゴホンゴホン [2] ジャージャー [2] シャーッ [2] シュカシュカ [2] ジュッ [2] チャップン [2] シュワシュワ [1] シュワシュワシュワ [1] ズルズルー [1] ゼロゼロ [1] ダー [1] チャップン [1] バシャバシャ [1] バチッ [1] バンバン [1] ビッ [1] ビビビッ [1] ヒューヒュー [1] プー [1] プチプチ [1] ブッ [1] ブルブル [1] ポチャ [1] ポチャポチャ [1] ポッタンポッタン [1]	チックン [87] チクッ [15] イタイイタイ [7] スーッ [7] ネバネバ [4] ヌルヌル [2] スーソー [1] チクチク [1] チクリ [1] ヒンヤリ [1] ブヨンブヨン [1] ベタベタ [1] ベタベタ [1]	ベッタン [54] マキマキ [36] キレイキレイ [32] ギューッ [26] アーン [23] ギューッ [22] ネンネ [18] モシモシ [18] ゴロン [17] フキフキ [15] モクモク [10] ジッと [9] チーン [8] ボンボン [8] ズッと [7] チャンと [7] ブクブクベッ [7] ゲー [7] グーッ [6] ゴシゴシ [6] スリスリ [6] ガラガラ [6] グッと [5] クルクル [5] グルグル [5] ダイジダイジ [5] ナイナイ [5] バツチン [4] バンザイ [4] ブクブク [4] ベタッ [4] ベッタンコ [4] アー [4] アワアワ [4] アンヨ [4] イー [3] ウウウン [3] ガラガラベッ [3] グチュグチュベッ [3] グリグリ [3] スーハー [3] バツテンコ [2] フー [2] ベッ [2] ユックリ [2] イナイイナイ [2] ウトウト [2] オエオエ [2] オッキ [2] カッカッ [2] ガブッ [2] カミカミ [2] キュッ [2] ギユッギユッ [2] ゲーバー [2] ゲーバーゲーバー [2] グジュグジュベッ [2] グルグルグル [2] グルッ [2] コチョコチョコ [2] ゴロゴロベッ [2] シッカリ [2] シャンコ [2] スーハースーハー [1] スッと [1] チョンチョン [1] チン [1] ドン [1] トントン [1] ニギニギ [1] バー [1] バクッ [1] バックン [1] バツテン [1] ビーン [1] ビタッ [1] フーン [1] フンッ [1] フンフン [1] ベッタンベッタン [1] モワモワ [1]	ドキドキ [6] スッキリ [5] ズキズキ [3] ポーッ [2] トクトク [1] ドクンドクン [1]	



今回、複数の意味を持つオノマトペは、〔動作〕に分類されることが多かった。藤野<sup>10)</sup>は、オノマトペの長所として、言葉では言い表せない複雑な動作内容も簡単に説明できると述べている。幼児は語彙が少ないことから、形容詞や形容動詞を用いた意思伝達が困難である。しかし、オノマトペは動作から受ける印象を感覚的に表現しているため、たとえ初めて耳にするオノマトペであっても、比較的理解しやすいと言う<sup>19)</sup>。

看護師は、難解な医療用語をオノマトペに置き換えることで、語彙の少ない幼児でも理解できると考えて使用しているのではないかと考えられる。動作を的確に伝達する際に非常に効果的<sup>20)</sup>であることから、看護師が〔動作〕のオノマトペを表出することで、結果的に幼児の対処行動に繋がるのであれば、その有用性は高いと言える。

### 3. オノマトペの心情融和性

単語頻度分析で注目すべきことは、出現頻度第1位であり、〔触覚〕に分類される、‘チックン’である。‘チックン’は、侵襲度に差のある4種の医療処置（採血、点滴、腰椎穿刺、骨髄穿刺）に共通にみられた。針を刺すときの痛みの表現としては、他に、‘ククク’、‘ククッ’、‘ククリ’がみられたが、今回、‘チックン’が突出して使用されていることがわかった。先行研究では、〔触覚〕に関する検討は十分になされていないが、痛みを伴う医療処置の説明では外すことのできない感覚である。幼児への説明では最も苦慮する場面といっても過言ではない。そこで、看護師が‘チックン’を多用する理由を考察した。

第一に、語形の特徴が挙げられる。オノマトペの語形にはいくつかのパターンがあり、語基を[A]とした場合には[Aッ], [Aーッ], [Aン]など、語基を[AB]とした場合には[ABッ], [ABン], [ABリ], [ABAB]などがあり、1つの語基を中心に変形パターンのオノマトペが存在する。‘チックン’は、‘クク’から派生した型であり、痛みを表現する際に同様のイメージを持つことが知られている。‘ククク’は音や動作の繰り返さないし連続という意味を表す反復形であり、繰り返し感覚が起こっているときに用いられる。一方、撥音「ン」は基本的に「共鳴」という象徴的な意味を表している語形である。‘ククッ’と‘ククリ’は、共に、ある痛みが一度だけ感じる様子を表している。両者を比較すると、‘ククッ’は‘ククリ’よりも瞬

間的で急な終わり方であると感じられるのに対し、‘ククリ’はややゆったりとした感じを表す。促音「ッ」は瞬時性やスピード感、撥音「ン」は共鳴を表すとされている<sup>12)</sup>。促音「ッ」に撥音「ン」を付加した‘チックン’は、瞬時性を保ちながら、音の共鳴をも重ね合わせる穏やかな表現と言える。痛みを伴う針の刺入について表現することばとして、的確さと優しさを包含する絶妙のオノマトペではないかと考える。

第二に、擬人化の用法から説明することができる。‘チックン’は、接尾辞に「クン」が付加された擬人化表現と捉えられる。幼児期は動植物、無生物などを擬人化して考える傾向にあり<sup>21)</sup>、「クン」を付加することで、一種の親しみを持たせていることが考えられる。年長幼児が心の準備をするためには、子どもの世界に入り、今の体験とこれからのイメージを繋げることが重要であると言われている<sup>22)</sup>。この意味において‘チックン’は、子どもにとって、仲間であり、味方であり、ヒーローにもなりえる存在として看護師に捉えられているかもしれない。‘チックン’には、オノマトペの持つ独特の心情融和性があると考えられる。

医療処置の説明では、子どもに必要な以上の恐怖を与えないように配慮することが求められる。時に、母親が発する「そんなに悪い子だと注射してもらおうよ」ということばに子どもは恐怖を感じる。年長幼児が安心した状態で痛みを伴う治療検査に臨むには子どもの感情に働きかける関わりが重要<sup>23)</sup>と言われるように、看護師は子どもに与える恐怖を最小限に、しかし正しく説明するために‘チックン’を選択するのではないかと考えられる。

## VI. 課 題

今回の分類方法では、各オノマトペの意味合いを反映している優位な項目へ分類したが、複数の感覚を同等に有し判断の難しい側面があった。今後、オノマトペの共感的表現（例えば視覚と聴覚の融合など）について探る必要がある。また、本研究は看護師10名の発話データの分析から得られたものであり、結果を一般化することは避けなければならない。また、本研究では、看護師の発話に含まれるオノマトペを調査したものであり、実際の幼児に対する反応を把握していないため、オノマトペを用いることで真に子どもの理解に繋がるのかは未知数である。しかしながら、今回、小児医療現場におけるオノマトペを収集し、使用実態

の一端を知ることができたことは意義深い。今後の課題としては、今回の結果をもとに地域によることばの違いも踏まえた、全国的な質問紙調査を行い、広く現場で使用されているオノマトペを明らかにすることが必要である。そこで得られたオノマトペを検討し、幼児を対象にオノマトペを用いた実証研究が必要であろう。オノマトペが幼児とのコミュニケーションに有効なのか検証することで、根拠を持って現場での利用が可能となろう。

## VII. 結 論

医療場面で、看護師が使用するオノマトペでは〔動作〕を利用した子どもへの働きかけが多いことがわかった。オノマトペは、状況喚起力、身体性、心情融和性を持つ、有用なことばであり、今後、医療場面での幼児への説明に活用できる可能性が示唆された。

オノマトペの利用は、病院での医療場面に限らず、予防接種や健康診断での対応といった予防医療の現場においても活用が期待できる。本研究の対象者である看護師に限らず、広く医療従事者に適用され、幼児に対する共通表現として利用でき、それはまた、幼児とその家族同士のコミュニケーションによる医療行為の理解促進にも有用となることが考えられる。

## 謝 辞

今回の調査にご協力いただいた看護師の皆様、ご指導いただいた東京大学医学部附属病院の平田佐智子先生、和光大学現代人間科学部教授のいとうたけひこ先生、神奈川大学人間科学部教授の瀬戸正弘先生に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は第60回日本小児保健協会学術集會にて発表した。

本研究は平成24～26年度文部科学省研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号24660030 代表 石館美弥子）による助成を受けている。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 和田久美子. 幼児の言語的対応における看護師の特性—保育士との比較を通して—. 小児保健研究 2008 ; 67 (4) : 557-564.
- 2) 石館美弥子. 幼児のプレパレーションに含まれるオノマトペの特徴. 横浜創英短期大学紀要 2012 ; 8 : 19-24.
- 3) 小野正弘. オノマトペがあるから日本語は楽しい擬音語・擬態語の豊かな世界. 平凡社, 2009.
- 4) Snow CE. Issues in the Study of Input : Fine Tuning University, Individual and Developmental Differences, and Necessary Causes. In Flecher & MacWhinny, B. eds. The Handbook of Child Language. Oxford ; Blackwell, 1995 : 180-193.
- 5) 荻野美佐子. 言語習得における母子の非言語的相互作用の役割. 上智大学心理学年報 1989 ; 13 : 61-75.
- 6) 早川勝広. 育児語と言語獲得, 言語生活 1981 ; 351 : 50-56.
- 7) 小椋たみこ, 吉本祥江, 坪田みのり. 母親の育児語と子どもの言語発達, 認知発達. 神戸大学発達科学部研究紀要 1997 ; 5 (1) : 1-14.
- 8) 遠矢浩一. 幼児の運動記憶における擬態語的音韻の言語化効果. 教育心理学研究 1992 ; 40 : 148-156.
- 9) 遠矢浩一. 障害児のリハビリテーションにおけるオノマトペの役割—心理リハビリテーションでの訓練課程の分析から—. 上越教育大学研究紀要 1993 ; 12 (2) : 269-278.
- 10) 藤野良孝. スポーツオノマトペの運動リズムを基にした柔道学習ビデオの検討. 情報学研究 2012 ; 21 : 1-8.
- 11) 近藤 綾, 渡辺大介. 保育者が用いるオノマトペの世界. 広島大学心理学研究 2008 ; 8 : 255-261.
- 12) 田守育啓, ローレンス・スコウラップ. オノマトペ—形態と意味—. くろしお出版, 2011.
- 13) Peirce CS. Writing of Charles S. Peirce. A chronological edition. (ed. by M. H. Fisch and C. Klossel), Bloomington, Indiana University Press, 1982-1993.
- 14) 小野正弘. 擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典. 小学館, 2011.
- 15) 福田香苗, 苧坂直行. 擬音語・擬態語の認知 (16) —K児の3歳6か月時の観察記録より—. 日本心理学会第56回大会発表論文集, 1992 : 814.
- 16) 原子はるみ, 奥野正義. 保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察. 北海道教育大学教育実践総合センター紀要 2007 ; 8 : 167-174.
- 17) 深田 智. 絵本の中のオノマトペ. 篠原和子, 宇野良子編. オノマトペ研究の射程 近づく音と意味.



ひつじ書房, 2013 : 183-199.

- 18) 川口義一, 「ナラ表現」の「文脈化」と「教材化」, 早稲田大学日本語研究教育センター紀要 2000 ; 13 : 27-49.
- 19) 吉村浩一, 関口洋美, オノマトペで捉える逆さめがねの世界, 法政大学文学部紀要 2006 ; 54 : 67-76.
- 20) 平田佐智子, 喜多伸一, オノマトペ・音韻象徴はコミュニケーションに貢献するか, 電子情報通信学会論文集, 2010 : 25-26.
- 21) Piaget J. Piaget's Theory. 1970. 中西 啓訳. ピアジェに学ぶ認知発達の科学. 京都 : 北大路書房, 2007.
- 22) 三村博美, 竹本三重子, 臼井徳子, 緊急入院において点滴処置を受ける年長幼児が心の準備をするための看護援助, 日本小児看護学会誌 2013 ; 22 (3) : 34-41.
- 23) 加藤令子, 痛みを伴う治療や検査を受ける年長幼児への「伝え方」に関わる看護援助—子どもが“安心”していただける関わりとは, 日本看護科学学会誌 2008 ; 28 (3) : 14-23.

### [Summary]

Onomatopoeias are the group of words that imitate the sounds or feelings they denote, suggesting its source object. In this study, actual conditions of the use of onomatopoeias to the patients in pediatric nursing practice were investigated. Ten nurses working at pediatric wards were interviewed, whose answers were audio-recorded and then analyzed. The onomatopoeic words they use were categorized in 5 groups of words related to vision, sound, sense of touch, action, and mood/emotion respectively. The result indicated that the nurses approached to preschoolers quite often using onomatopoeias related to action. It is suggested that onomatopoeias are useful words which can evoke recognition of the environment and physical conditions of the patients, which have more affinity to emotions, in explanation to preschoolers about the pediatric medical procedures they undergo.

---

### [Key words]

onomatopoeias in japanese, nurse, preschooler, medical procedure